

定住意識に影響を与える個人属性および地区環境の要因に関する研究

A Study on the Factors Affecting Settlement Consciousness from the Viewpoint of Personal Attribute and Living Environment

小塚みすず*

Misuzu KOZUKA*

In this paper, I report on the significant factors affecting settlement consciousness from the view point of personal attributes and living environment. A web questionnaire was conducted for residents of 49 cities in Japan. The obtained results are shown as follows: Firstly, it was clarified that the settlement consciousness of respondents was high. Secondly, by using the quantification theory II, I clarified the relations between the personal attributes/living environment and the settlement consciousness. It was showed that one of resident's ages had strongly influenced for the settlement consciousness. Then, it is clarified that the respondents of 20's and 30's age require "accessibility and convenience to urban facility", and the respondents of over 40's age require "spatial attraction of living quarter, e.g. standard of safety or quality of life".

Keywords: Settlement, Personal attribute, Living environment, Quantification theory II

定住、個人属性、地区環境、数量化理論Ⅱ類

1. はじめに

1-1. 背景および目的

総務省は、今後の魅力あふれる地域形成を目指して、「定住自立圏構想」を打ち出している¹⁾。この背景には、これまでの30年間で約1,500万人増加した我が国の総人口が、今後30年間で約1,700万人減少することが見込まれている人口減少の問題をはじめ、少子・高齢化やの進展、地方から都市部への人口流出、新たなライフスタイル、地域経済の低迷、地方分権の流れなどがあげられている。また、国土交通省では、社会資本整備審議会答申で「新しい時代の都市計画はいかにあるべきか。(2006年2月1日)」において、国として望ましい都市構造として「集約型都市構造」をあげ、その実現に向けた都市交通施策と市街地整備の方向や課題に取り組んでいる²⁾。

このように、地域への定住化の促進や、都市や地域を構造から見直し、変えていこうとする機運が高まっているが、こうした今後の魅力あふれる、望ましい地域形成を目指すにあたっては、実際にそこで活動を行う人々が定住や居住地の地区環境についてどのように考えているのかを把握し、住民の意識を計画に反映させていくことが必要である。

そこで、本稿は、WEBアンケート調査により、居住者の定住意識を把握した後、定住意識に影響を与える要因を回答者の個人属性と居住地の地区環境から探る。

ここで、定住とは「一定の場所に居住を定めて住むこと(広辞苑)」とある。また、土肥ら³⁾は「居住者が地域との間に安定した良好な心的結びつきを持って生活している状態」と定義している。本稿では「ある地域に居住を定めて住み続けること」とし、前者より広範で継続的な概念として定義する。

1-2. 既往研究

定住意識や居住地の環境に関する研究は従来からよく行われ

てきた。例えば、鳴海ら⁴⁾の大阪市を事例に都心周辺部の小規模事業所従業者の住環境評価の分析から、大阪市固有の問題構造を明らかにしたもの、大江ら⁵⁾の東京都心地域の新规定着層の居住動向や永年居住層との意識の比較から定住について論じたもの、岡田ら⁶⁾の大阪市東区の2地区の比較分析により、都心業務地区での定住の可能性と要因を明らかにしたもの、土肥ら³⁾の居住者と地域との心的結びつきの実態から住宅地計画について論じたもの、中島ら⁷⁾の長岡市の若青年層の移動形態の代表像を明らかにした上で、居住者属性・居住理由・居住環境から居住を進める方策についてまとめたもの、中鉢ら⁸⁾の札幌市を対象に定住意向、地域中心核に対する整備項目、整備主体との相互関係を明らかにし、整備プログラムの構造化を図ったもの、などがある。

また、近年では、小塚らの⁹⁾¹⁰⁾大型店周辺の地域を対象とし、良好な居住地の形成に向けた住民と大型店の協働の方法について考察したものや、具体的な施策として交通静穏化施策の導入を検討したもの、丁ら¹¹⁾の既往研究のモデルを応用し、施設整備状況などから居住地環境の評価モデルを作成し、徳島市街地への適用を通じて、具体的な都心居住の課題について示したもの、高塚ら¹²⁾の高松市における都心居住者の情報が郊外居住者の意識に影響を与え、都心居住の促進に寄与するか否か、また、意識変容させる要因やその程度を明らかにしたもの、などがある。これらは具体的な地域を対象とし、地域の状況の整理・把握や住民へのアンケート調査に基づき分析・考察された研究が多く、内容も理解しやすい。しかし、これらはある地域に限定されたものである。全国の住民を対象とした調査は、例えば、内閣府などで行われているものの、研究として定住意識やこれに与える影響について示したものはない。

本調査は全国の住民を対象とすることで、一般的に行われている個人属性の他、都市や地域別の集計・分析が可能となる。ま

* 正会員・(株)豊田中央研究所 Toyota Central R&D Labs., Inc.

た、地域の特徴を踏まえた分析を行うことにより、今後の研究の方向を具体的に示すことができると考える。

2. 調査の概要

本調査は居住者の地域への定住意識および定住意識に影響する要因を把握することを目的とし、国内 49 都市の 15 歳以上の住民を対象にアンケート調査を実施した(表-1)。調査は WEB 調査形式(ヤフーバリューインサイト(株))であり、2008 年 10 月 23 日から 10 月 28 日にかけて実施した。なお、対象都市は、回答者の居住地や交通の特性などの面から分析・考察を行うことを考慮し、全国都市交通特性調査⁽¹⁾を参考に選定している。また、回答者の居住地や属性などが偏ることを防ぐため、あらかじめ収集するサンプル数の設定や調整を行っている⁽²⁾。

調査の結果、2,977 名の回答を得た。表-2 は個人属性別の集計結果である。性別は男女ともに同程度のサンプルが得られたが、年齢では 10 歳代以下が少なく、職業では会社員・公務員が多くなっている。しかし、これらの偏りは分析に大きな影響を及ぼすようなものではない。

表-1 調査対象都市

都市名	都市の種類
東京区部 千葉市 川崎市 横浜市 名古屋市 京都市 大阪市 神戸市	三大都市圏 中心都市
札幌市 仙台市 広島市 福岡市 北九州市	地方圏 中枢都市
弘前市 盛岡市 郡山市 宇都宮市 金沢市 浜松市 姫路市 松江市 徳島市 高松市 松山市 高知市 熊本市 鹿児島市	地方圏 中核都市
いわき市 取手市 所沢市 松戸市 青梅市 春日井市 豊橋市 豊田市 岐阜市 静岡市 宇治市 堺市 奈良市	三大都市圏 周辺都市
小樽市 上越市 小松市 福井市 磐田市 呉市 今治市 諫早市 浦添市	地方圏 周辺都市

表-2 回答者の個人属性

個人属性	カテゴリー	サンプル数	割合(%)
性別	男	1,501	50.4
	女	1,476	49.6
年齢	10 歳代以下	199	6.7
	20 歳代	532	17.9
	30 歳代	648	21.8
	40 歳代	528	17.7
	50 歳代	587	19.7
	60 歳以上	483	16.2
職業	会社員・公務員	1,147	38.5
	自営業・自由業	416	14.0
	専業主婦	534	17.9
	学生・生徒	304	10.2
	パート・アルバイト	356	12.0
	無職	220	7.4

3. 定住意識とその評価に与える影響要因

人口減少・高齢社会となる中、今後、計画的に人々が集住するまちづくりを進めていくことが求められている⁽³⁾。もし、都市政策として人々の集住化を図ろうとするならば、半ば強制的に転居させるよりも、自然に人々が誘導された結果として集住という形に結びついていくことの方が理想的である。しかし、後者は前者に比べ時間がかかる上に、その地域に人々が住みたいと思う条件が整備されていなければ難しいだろう。そこで、本節では定住意識の評価に与える影響要因を探る。まず、3-1 で人々の定住意

識を把握した後、3-2 および 3-3 で定住意識に影響を与える要因を、回答者の「個人属性等」と「居住地環境」の 2 つの側面から明らかにする。分析には数量化理論Ⅱ類を用いる。

3-1. 定住意識

人々の定住意識を探るため、「あなたは現在のお住まいの地域に今後も住み続けたいですか」と尋ね、「是非住み続けたい、どちらかと言えば住み続けたい、どちらとも言えない、どちらかと言えば住み続けたくない、全く住み続けたくない」の 5 段階評価で回答を求めた。

その結果、図-1 より、「是非住み続けたい、どちらかと言えば住み続けたい」の回答者は合わせて 71.0%、一方、「全く住み続けたくない、どちらかと言えば住み続けたくない」の回答者は合わせて 10.6%となり、現在の地域に対する定住意識の高さが明らかとなった。

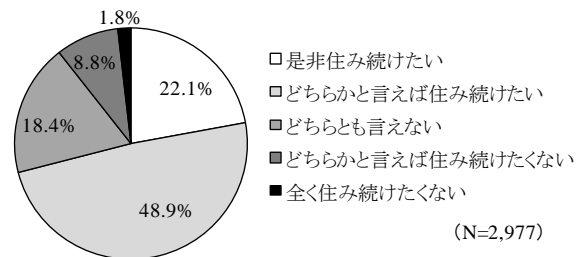


図-1 定住意識の評価

3-2. 個人属性が定住意識評価に与える影響の分析

定住意識の評価には、年齢や職業等や日常生活の状況といった個人属性と、公共的なものである都市施設の整備状況や空間の魅力などの地区環境が影響すると思われる。本節では、定住意識の評価に影響を与える個人属性を数量化理論Ⅱ類を用いて明らかにする。目的変数は定住意識とし、「是非住み続けたい、どちらかと言えば住み続けたい」を『定住意識あり』、「全く住み続けたくない、どちらかと言えば住み続けたくない」と『定住意識なし』と 2 つのカテゴリーに再編成した。なお、「どちらとも言えない」の回答は用いない。説明変数には回答者の個人属性、生活状況、都市類型などを表す 14 要因を用いる。目的変数は全 2,428 サンプル⁽⁴⁾であり、その内訳は、定住意識あり：2,113 サンプル、定住意識なし：315 サンプルとなり、選択結果が定住意識ありに偏っているため、相関比は 0.053 と低い値になっている。また、各説明変数のレンジと偏相関係数の上位項目の順位の間には若干の違いが見られるが、大きな不整合ではないため、表-3 に示す分析結果を考察する。表-3 はレンジ値の大きな順、つまり、定住意識に与える影響が強いものから順に並べている。

分析の結果、年代、外出頻度、職業、都市類型、バス利用満足度などが定住意識の評価に影響のある要因としてあげられる。例えば、年代が上がるにつれて定住意識が高くなる傾向にある。ここで、定住意向のある層を整理すると、3 大都市圏周辺あるいは地方中枢都市に住む 40 歳以上の定職者にその傾向が見られる。一方、定住意向のない層は、地方圏周辺都市に住む学生やパート・アルバイトを中心とした青年層である。この結果は、一般的に、年齢が若いほど進学、就職、転職、結婚など居住地を変える機会が多いことや、ある程度の年齢になれば家庭や職の安定に加

え、地域社会との結びつき(コミュニティ)や生活の慣れなど、年を重ねるほど新天地へ移り住むという気持ち自体が弱まることから想像できる。

3-3. 地区環境が定住意識評価に与える影響の分析

地区環境は多種多様であり、例え、同じ地区に暮らしていても年代や居住歴などの個人属性や都市生活の経験など、人によって評価は異なるため、集計や分析の際には、これらを考慮する必要がある。前章では、個人属性である年代が定住意識の評価に最も大きく影響していることを明らかにしたが、本節ではこの結果を踏まえ、年代により定住意識の評価に与える地区環境要因を明ら

表3 定住意識評価に影響を与える個人属性の要因

説明変数	カテゴリー	サンプル数	カテゴリー一値	レンジ値(偏相関係数)
年代	10歳代	151	-0.016	1.226 (0.109)
	20歳代	425	-0.662	
	30歳代	525	-0.420	
	40歳代	426	0.037	
	50歳代	487	0.524	
	60歳代以上	414	0.564	
外出頻度	週5・6回	1,315	0.146	1.205 (0.070)
	週2・4回	948	-0.018	
	週1回以下	165	-1.060	
職業	会社員・公務員	937	0.393	1.031 (0.073)
	自営・自由業	337	-0.091	
	専業主婦	451	-0.222	
	学生・生徒	229	-0.639	
	パート・アルバイト	288	-0.223	
	無職	186	-0.142	
都市類型	三大都市圏中心都市	868	-0.082	0.918 (0.049)
	地方圏中核都市	385	0.045	
	地方圏中核都市	699	-0.008	
	三大都市圏周辺都市	314	0.438	
	地方圏周辺都市	162	-0.479	
バス利用満足度	満足	695	0.390	0.841 (0.074)
	やや満足	776	0.207	
	不満	957	-0.451	
家族構成	単身	382	-0.493	0.727 (0.061)
	夫婦のみ	264	0.234	
	夫婦+子供	995	0.214	
	親夫婦+夫婦+子供	316	-0.266	
	その他	471	-0.004	
世帯年収	400万円未満	686	-0.047	0.647 (0.058)
	400万～600万円	616	0.345	
	600万～1000万円	743	-0.302	
	1000万円以上	383	0.115	
自動車免許保有	有り	2,031	-0.102	0.625 (0.046)
	無し	397	0.523	
自動車利用満足度	満足	1,624	0.137	0.603 (0.045)
	やや満足	521	-0.174	
	不満	283	-0.466	
電車利用満足度	満足	1,087	0.169	0.543 (0.043)
	やや満足	756	0.046	
	不満	585	-0.373	
世帯当り自動車保有台数	0台	452	0.268	0.462 (0.044)
	1台	1,193	-0.194	
	2台以上	1,315	0.141	
1ヶ月当り自動車走行距離	100km未満	1,300	-0.417	0.369 (0.036)
	100～1000km	871	0.228	
	1000km以上	257	-0.054	
都市自動車分担率	低地域	833	0.069	0.291 (0.029)
	中地域	794	0.110	
	高地域	801	-0.181	
性別	男	1,211	0.104	0.207 (0.023)
	女	1,217	-0.103	
目的変数の重心	定住意識あり	2,113	0.089	
	定住意識なし	315	-0.598	
相関比				0.053
半原的率				64%

かにする。3-2と同様、分析手法は数量化理論Ⅱ類とし、目的変数に定住意識、説明変数には回答者の居住地近隣の様子を表す18の項目を用いる。

(1) 回答者宅の近隣の様子

アンケート調査では、回答者宅の近隣の様子について、表4に示した27項目を提示し「全くそうだ」～「全くそうでない」の5段階評価で尋ねた(「どちらとも言えない」を中間に置いている)。集計結果を表4に示すが、平均値が高いほど肯定の度合いが強いことを意味しており、提示した項目の中では「4.歩いていける範囲内に日常の買い物ができる店がある(3.90)」「9.近隣には公園や広場がある(3.86)」「街の中心など都心部に容易に行くことができる(3.84)」などの値が高い。一方、「7.近隣には自転車道が整備されている(2.39)」「12.近隣の交通量は少ない(2.59)」「18.近隣の人々のコミュニティ活動への参加は積極的である(2.70)」などの値は低い。

表4 回答者宅の近隣の様子

	近隣の様子項目	平均値	検定	Ⅱ類
1	近隣の大型スーパーや商業施設などに容易に行くことができる	3.75	**	○
2	街の中心など都心部に容易に行くことができる	3.84	***	○
3	図書館、スポーツクラブ、コミュニティセンターなどを使用しやすい	3.17	***	○
4	歩いていける範囲内に日常の買い物ができる店がある	3.90	**	
5	高速道路や自動車専用道路を利用しやすい	3.39	**	
6	バスや電車などの公共交通機関を利用しやすい	3.64	***	○
7	近隣には自転車道が整備されている	2.39		○
8	近隣には歩道が整備されている	3.38		
9	近隣には公園や広場がある	3.86	*	○
10	近隣は閑静なところである	3.45		○
11	近隣の犯罪率が低い	3.32	***	○
12	近隣の交通量は少ない	2.59	***	
13	近隣では交通事故がよく起こる	2.77		○
14	安全に一人歩きできる	3.52	***	○
15	屋外で子供を遊ばせても安全である	3.14		
16	夜間の街路灯が整備されている	3.38	***	○
17	職業、年齢など幅広い層の人が住んでいる	3.68		○
18	近隣の人々のコミュニティ活動への参加は積極的である	2.70	***	
19	近隣同士の付き合いが多い	2.76	***	○
20	近隣は自分のところと変わらない生活レベルにあると思う	3.39		○
21	近隣の建物の外観や風景は魅力的である	2.84		○
22	近隣環境の維持保全は良くおこなわれている	3.32	**	
23	住宅のスタイル・外観が多様性に富んでいる	3.10	***	○
24	家の周りの道路には街路樹が多い	3.10	***	
25	公園、図書館、運動場などの公共施設が良く整備されている	3.27	***	
26	家の周りには駐車場が多い	3.26	**	○
27	家の周りの道路は道幅が広くゆったりしている	2.93	*	○

※1 「全くそうだ」を5点、以下、4、3、2点、「全くそうでない」を1点と得点化し、全回答者の評価の平均値を算出。

※2 近隣の様子と年代(10歳～60歳代以上5段階)による関連を確認するため、独立性の検定(χ^2 検定)を行った。

***: p<0.01, **: p<0.05, *: p<0.10

※3 ○印は数量化理論Ⅱ類で説明変数として用いた項目

評価は回答者の個人属性によって異なると考えられることから、年代別の比較を行った。年代は10歳代から10代おきに6つの年代に分け集計したのち、年代ごとの平均値の差異を確認するため有意差検定を行った。その結果、19の項目で統計的有意差を確認した。有意差が見られた項目はすべて年代が上がるにつれ平均値も高くなっている。ここで、10歳代の平均値は20・30歳代の平均値よりも高いものが多くある他、40・50歳代の平均値と近いことを確認した。これは、調査の回答者の年齢条件を15歳以上としたことに因るものと考えられる。すなわち、家族と生活をしている10歳代の生徒や学生などの回答は、ちょうど彼らの親の年代にあたる40、50歳代の回答と近くなっていることが推察される。

以上より、回答者宅の近隣には、徒歩圏内に日常の買い物ができる店舗や公園・広場があり、都心にも比較的容易にアクセスできるなど都市施設が整備されているが、交通やコミュニティとの関わりは決して十分とは言えない状況である。また、年代が上がるにつれて各項目の評価も高くなっていることから、年代によって居住地の環境あるいは評価尺度にある一定の差があることが推測される。

(2) 地区環境が定住意識評価に与える影響

3-2で年代が定住意識に大きな影響を与えていること、また、3-3(1)で地区環境要因の項目の多くが年代によって評価値に差があることが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、分析対象を20・30歳代と40・50・60歳代以上(以下、40歳代以上)に分けて、それぞれについて地区環境要因が定住意識評価に与える影響を探る。なお、10歳代の回答者は、3-2の分析のカテゴリ一値や3-3(1)の平均値などを考慮し、本分析には用いない。

数量化理論Ⅱ類を行うにあたり、目的変数は3-2と同様、定住意識である。説明変数は表4に示した回答者宅の近隣の様子を表す27項目のうち、各項目の内容の類似性、評価結果の相関、年代による評価値の差、分析結果の説明力などを考慮して18項目を用いる(表4の○印の項目を採用)。また、回答者のうち、「全くそうだ、ややそうだ」を『そうだ』、「全くそうでない、そうでない」を『そうでない』とし、説明変数のカテゴリ一を『そうだ』、『どちらとも言えない』、『そうでない』の3つに再編成した。分析結果は表5に示すが、定住意識の評価の偏りのため、相関比は低い。

分析の結果、まず、20・30歳代に着目すると、レンジ値の大きさから定住意向には、「街

の中心など都心部に容易に行くことができる」「近隣の建物の外観や風景は魅力的である」「近隣の大型スーパーや商業施設などに容易に行くことができる」など、目的地までの近接性に加え、近隣の景観に関する変数が強く影響している。また、カテゴリ一値から、これらの変数に対し否定的な回答者、つまり、各条件に

表5 定住意識評価に影響を与える地区環境の要因(年代別分析)

説明変数	カテゴリ	20・30歳代			40歳代以上			
		サンプル数	カテゴリ一値	レンジ値(偏相関係数)	サンプル数	カテゴリ一値	レンジ値(偏相関係数)	
近隣の大型スーパーや商業施設などに容易に行くことができる	1	635	0.130	0.662 (0.127)	937	0.060	0.046 (0.069)	6
	2	172	-0.040		216	0.052		
	3	143	-0.531		174	-0.386		
街の中心など都心部に容易に行くことができる	1	671	0.195	0.804 (0.170)	1001	0.083	0.581 (0.075)	4
	2	149	-0.349		192	-0.086		
	3	130	-0.609		134	-0.498		
図書館、スポーツクラブ、コミュニティセンターなどを使用しやすい	1	396	0.227	0.473 (0.113)	648	0.080	0.215 (0.041)	9
	2	271	-0.246		349	-0.135		
	3	283	-0.083		330	-0.013		
バスや電車などの公共交通機関を利用しやすい	1	599	-0.030	0.262 (0.051)	898	0.038	0.128 (0.023)	14
	2	152	0.200		195	-0.066		
	3	199	-0.063		234	-0.090		
近隣には自転車道が整備されている	1	203	-0.112	0.149 (0.034)	286	0.109	0.155 (0.029)	13
	2	203	0.036		279	0.015		
	3	544	0.028		762	-0.046		
近隣には公園や広場がある	1	661	0.041	0.162 (0.037)	1012	0.043	0.254 (0.038)	8
	2	146	-0.121		190	-0.089		
	3	143	-0.068		125	-0.211		
近隣は閑静なところである	1	500	0.170	0.630 (0.136)	766	-0.030	0.108 (0.022)	15
	2	242	0.043		334	0.078		
	3	208	-0.460		227	-0.013		
近隣の犯罪率は低い	1	363	0.160	0.423 (0.085)	670	0.024	0.055 (0.012)	17
	2	397	-0.020		465	-0.031		
	3	190	-0.263		192	-0.007		
近隣では交通事故がよく起こる	1	205	-0.271	0.346 (0.082)	290	-0.085	0.198 (0.044)	10
	2	333	0.075		497	-0.073		
	3	412	0.074		540	0.113		
安全に一人歩きできる	1	464	-0.002	0.355 (0.069)	838	0.183	1.236 (0.158)	1
	2	323	0.121		360	-0.048		
	3	163	-0.234		129	-1.054		
夜間の街路灯が整備されている	1	437	-0.007	0.105 (0.022)	794	-0.024	0.085 (0.017)	16
	2	270	-0.044		315	0.061		
	3	243	0.062		218	-0.003		
職業、年齢など幅広い層の人が住んでいる	1	606	-0.020	0.200 (0.034)	849	0.030	0.183 (0.025)	12
	2	256	0.086		348	-0.017		
	3	88	-0.114		130	-0.153		
近隣同士の付き合いは多い	1	229	0.128	0.214 (0.049)	383	0.085	0.326 (0.069)	7
	2	292	0.025		519	0.112		
	3	429	-0.085		425	-0.214		
近隣は自分のところと変わらない生活レベルにあると思う	1	446	0.044	0.155 (0.029)	626	0.165	0.741 (0.098)	3
	2	389	-0.018		580	-0.057		
	3	115	-0.111		121	-0.576		
近隣の建物の外観や風景は魅力的である	1	242	0.265	0.791 (0.197)	328	0.222	0.823 (0.161)	2
	2	356	0.302		597	0.258		
	3	352	-0.488		402	-0.565		
住宅のスタイル・外観はバラエティに富んでいる	1	301	0.120	0.417 (0.106)	530	0.176	0.565 (0.092)	5
	2	374	0.121		537	0.015		
	3	275	-0.296		260	-0.389		
家の周りには駐車場が多い	1	449	0.027	0.055 (0.015)	630	-0.088	0.198 (0.040)	11
	2	271	-0.028		400	0.057		
	3	230	-0.019		297	0.110		
家の周りの道路は道幅が広くゆったりしている	1	297	0.178	0.384 (0.099)	500	0.003	0.022 (0.004)	18
	2	635	0.130		937	0.060		
	3	172	-0.040		216	0.052		
目的変数の重心	定住意識あり	790	0.232	1,195	0.147			
	定住意識なし	160	-1.143	132	-1.331			
相関比			0.265		0.196			
的中率			78.0%		80.6%			

注) カテゴリ1: そうだ、2: どちらとも言えない、3: そうでない。
 レンジ値の数字(1 から 18)は説明変数のレンジ値の大きさの順位を示す。■はレンジ値が大きかった上位5項目。

当てはまらない地区に住む人ほど、定住意識がより低く、評価に及ぼす影響は大きい。他方、40歳代以上は「安全に一人歩きできる」「近隣の建物の外観や風景は魅力的である」「近隣は自分のところと変わらない生活レベルにあると思う」など、居住地区内の安全性や近隣との調和に関する変数が強く影響している。各変数のカテゴリ一値は20・30歳代と同様、否定的な回答者ほど、定住意識が低い。

次に、両者の分析結果の相違に着目する。説明変数の順位を比較すると、順位差が特に大きかった変数のうち、20・30歳代の方が順位が上位だったものは、「近隣が閑静なところである」「近隣の犯罪率は低い」「家の周りの道路は道幅が広くゆったりしている」であり、他方、40歳代以上の方が上位だったものは、「近隣は自分のところと変わらない生活レベルにあると思う」「安全に一人歩きできる」「家の周りには駐車場が多い」などである。

以上より、20・30歳代と40歳代以上とでは地域への定住につながると思われる地区環境の条件が異なることが明らかとなった。特に、20・30歳代は都市施設への近接性や利便性の良さを、40歳代以上は居住地の安全性や水準といった空間の魅力を求めていると考えられる。したがって、人々の定住を図る際は、年齢により地区に求めている条件が異なることを考慮し計画を進める必要がある。つまり、例えば、ある地区において定住化を図る場合、全年代を対象とするのか、あるいは、ある年代を対象とするのかによって、都市施設整備の方針や実施順序を変えることも必要になると考えられる。

4. おわりに

本稿は居住者の定住意識とこれに影響を与える要因を明らかにするため、全国49都市の市民を対象にアンケート調査を実施し、個人属性と居住地の地区環境の状況を視点に分析を行った。以下に、本調査・分析により得られた知見を述べる。

- 1) 回答者の現在の地域に対する定住意識は高い。
- 2) 個人属性や生活状況などの個人属性と定住意識との関係について、数量化理論Ⅱ類を用いて分析した結果、定住意識に年代が強く影響しており、年代が上がるにつれて定住意識も高まっていることが明らかとなった。
- 3) 回答者宅の近隣には、徒歩圏内に日常の買い物ができる店舗や公園・広場があり、都心にも比較的容易にアクセスできるなど都市施設が整備されているが、交通やコミュニティとの関わりは決して十分とは言えない状況である。また、年代によって地区環境の評価に差異があることが明らかとなった。
- 4) 地区環境と定住意識との関係について、回答者を20・30歳代と40歳代以上に2分類し、数量化理論Ⅱ類を用いて分析した結果、20・30歳代は「都市施設への近接性や利便性の良さ」、40歳代以上は「居住地の安全性や水準といった空間の魅力」を求めていることを明らかにした。

本稿で示した、定住意識は年齢とともに強くなる傾向にあることや、年代によって居住地の環境に特徴があることなどは、当然の結果を確認したに過ぎないのかもしれない。しかし、例えば、最近、都会においても局所的に高齢化が進んでいる地区が確認さ

れるようになるなど¹⁴⁾¹⁵⁾、人口高齢化は地方都市だけの問題でなくなっている。そして、地域の人口構成の変化は生活の質の維持の面からみて、今後、考慮すべき課題である。人々の地域への定住化を図ろうとするならば、単に人を集めることを考えるのではなく、どのような人がどれだけ住むべきか、つまり、「居住者の数(=量)」だけでなく、「居住者属性のバランス(=質)」、そして、これを支えることの可能なサービスを考慮した戦略的な計画をとっていくことが求められる。そのようにして、居住者にとっても都市にとっても良い関係を探っていくことが重要である。

今後は定住意識の評価に影響を与える要因としてあげられた都市類型を視点とした研究や現地調査などを通して、定住のための具体的な条件を探る予定である。

補注

- (1) 都市規模と都市の交通特性との関係を明らかにすることを主な目的とし、昭和62年から平成17年までの間に計4回の調査が行われている。
- (2) 全国都市交通特性調査を基に、自動車交通分担率の高さにより、都市を「低・中・高」に3分類し、各分類の回答者数が同程度になるようにした。また、各都市の人口規模、性、年齢などを考慮している。
- (3) 定住意識の回答者全2,977名から、分析に用いない「どちらとも言えない」と回答者549名を除いたため、サンプル数は2,428となった。

参考文献

- 1) 定住自立圏構想研究会(2008)「定住自立圏構想研究会報告書～住みたいまちで暮らせる日本を～」,総務省。
http://www.soumu.go.jp/menu_03/shingi_kenkyu/kenkyu/teizyu/pdf/080704_3_3.pdf
- 2) 社会資本整備審議会(2006)「新しい時代の都市計画は、いかにあるべきか。(第一次答申)」,国土交通省。
<http://www.mlit.go.jp/singikai/infra/toushin/images/04/021.pdf>
- 3) 土肥博至・若林時郎(1981)「住民の居住環境評価と定住意識の関連についての考察」,第21回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.49-54.
- 4) 鳴海邦頼・澤木昌典(1981)「都心周辺地域居住の規定要因に関する考察—大阪市における小規模事業所従業者調査を通じて」,第19回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.295-300.
- 5) 大江守之・中林一樹(1981)「東京都心地域における新規定着層の居住動向と定住意識」,第19回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.505-510.
- 6) 岡田知子・高橋類(1980)「都心業務地区における定住要因に関する研究—大阪市船場地区の場合—」,第20回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.163-168.
- 7) 土肥博至・若林時郎(1981)「住民の居住環境評価と定住意識の関連についての考察」,第21回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.49-54.
- 8) 中鉢令兒・小林英嗣(1998)「成熟都市における中心核整備に関する研究—定住意向と整備プログラムについて—」,第33回日本都市計画学会学術研究論文集,pp.763-767.
- 9) 小塚みすず・本多義明(2005)「既成市街地における住民と大型店の協働のための二、三の考察—福井市の大型店周辺地区を事例として—」,環境共生 Vol.11, pp.23-32.
- 10) 小塚みすず・本多義明(2005)「大型店周辺の居住地区における交通静穏化施策策定のための基礎的考察」,環境情報科学論文集 No.19, pp.419-424.
- 11) 丁育華・近藤光男・村上幸二郎・大西賢和・渡辺公次郎(2008)「高齢者の都心居住を考慮した都市施設の配置評価モデルとその地方都市への適用に関する研究」,都市計画論文集 No.43-3, pp.13-18.
- 12) 高塚創・泉英明(2008)「都心居住ライフスタイルと郊外居住者の意識:高松市におけるケース閲覧型調査から」,都市計画論文集 No.43-3, pp.487-492.
- 13) 国土交通省都市・地域整備局(2007)「都市における人の動き—平成17年全国都市交通特性調査集計結果から—」。
http://www.mlit.go.jp/crd/tosiko/zpt/pdf/h17zenkokupt_panf.pdf
- 14) 東京新聞「東京・新宿に「限界集落」大規模都営団地が高齢化」,2008.9.6
- 15) 日本経済新聞「老いる都市」,2009.2.16